

# 経済・金融 フラッシュ

## 資金循環統計(11年7-9月期)

～個人金融資産は前年比1兆円増の1471兆円

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

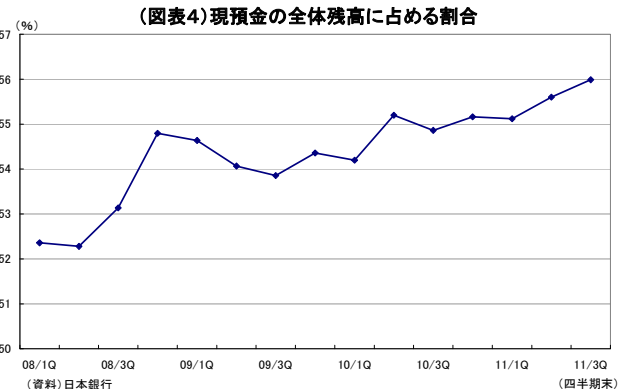
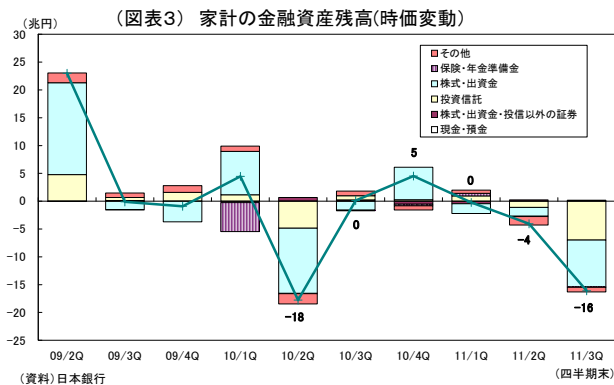
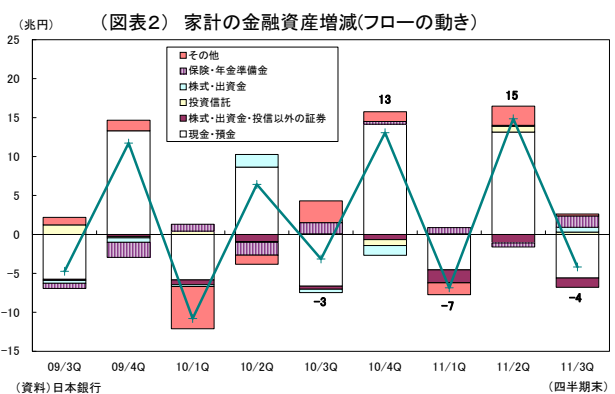
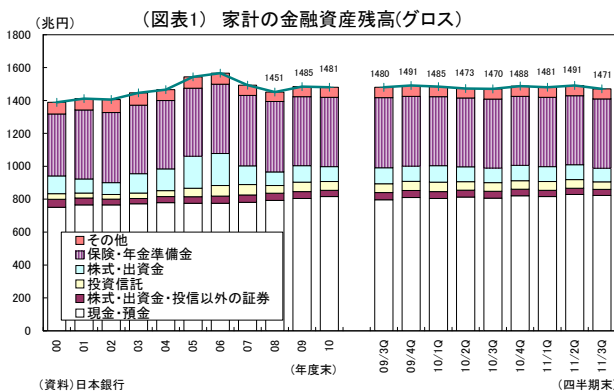
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

### 1. 個人金融資産残高(11年9月末): 前期比では20兆円減、現預金割合は過去最高に

2011年9月末の個人金融資産残高は、前年比1兆円(0.1%)増の1471兆円となった。一年間でフローの資金流入が17兆円あったものの、株安・円高等を背景とする時価の減少16兆円(うち投資信託が7兆円減、株式・出資金が6兆円減)ではほぼ相殺された形に。

四半期ベースでは、前期(2011年6月)末比で20兆円の減少となった。7-9月は一般的に賞与の支給月を含まないため例年フローで流出超となる傾向がある。今回も4兆円の流出超となったうえ、時価の減少16兆円(内訳は株式・出資金が8兆円減、投資信託が7兆円減)が加わった。欧州債務危機拡大等に伴う株安や円高が大きく響いたようだ。

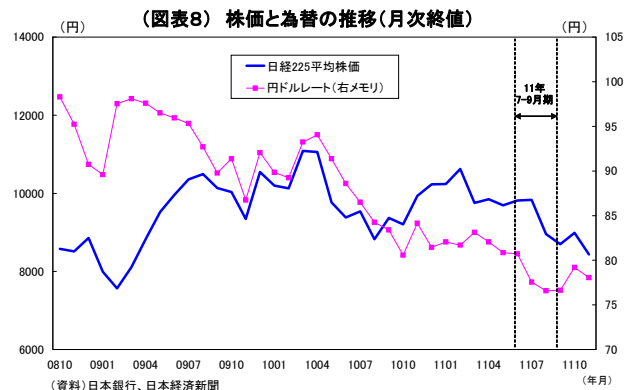
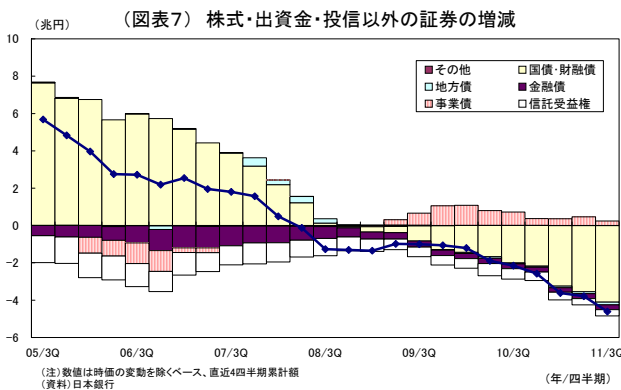
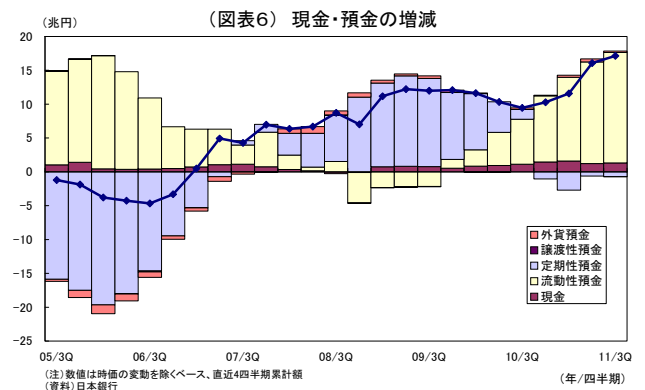
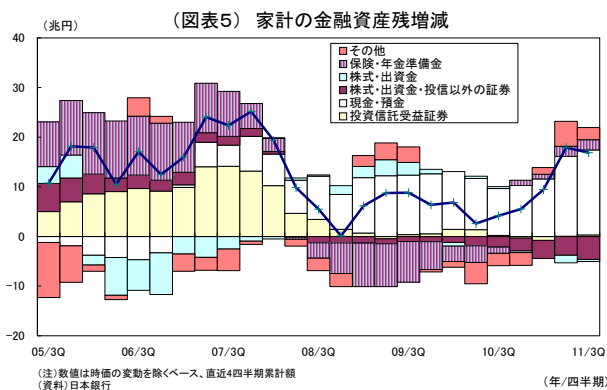
また、個人金融資産残高に占める現預金の割合が56.0%と現行統計開始以来の最高を更新。運用環境の悪化などを受け、家計のリスク回避姿勢がますます鮮明になっている(図表1～4)。



## 2. フロー(時価変動を除いた流出入額)の基調: 流動性預金への一極集中がさらに加速

四半期ベースでフローの内訳を見るにあたり、季節要因を除くため、直近4四半期累計というやや長めの基調を捉えた動きをみると、投資信託への資金流入が停滞、株式・出資金、(個人向け)国債等からは資金が流出、現預金が大幅に増加という傾向が顕著になっている。

現預金の内訳としても、最近では現金や普通預金など流動性預金へ資金流入が進む一方、定期性預金からは資金がやや流出している。要因としては、定期性預金の金利低下に伴い普通預金との金利差があまりなくなっていることに加え、震災後の流動性選好継続や投資環境悪化を受けた待機資金の積み上がりなどがあると考えられる(図表5~8)。



## 3. 部門別資金過不足等: 海外の国債保有額が過去最高に、政府債務が家計純資産に接近

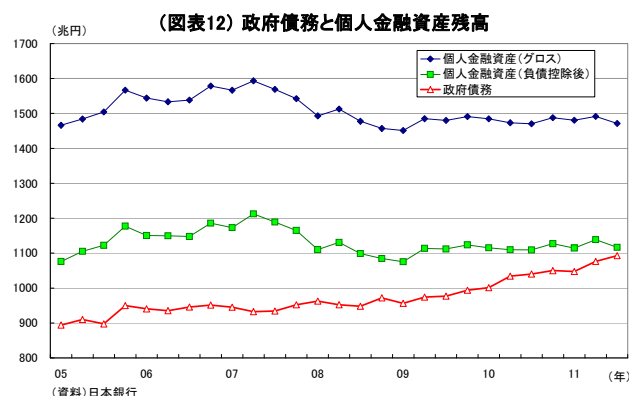
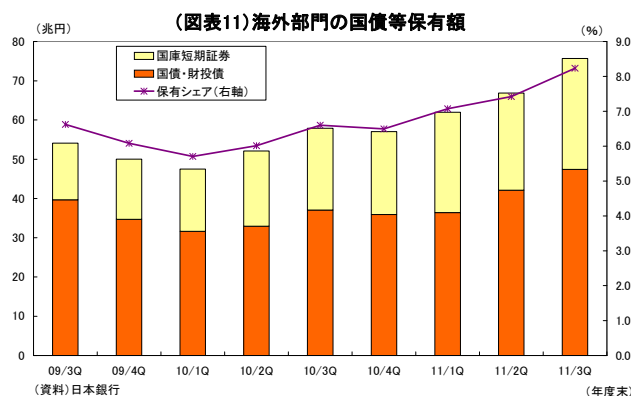
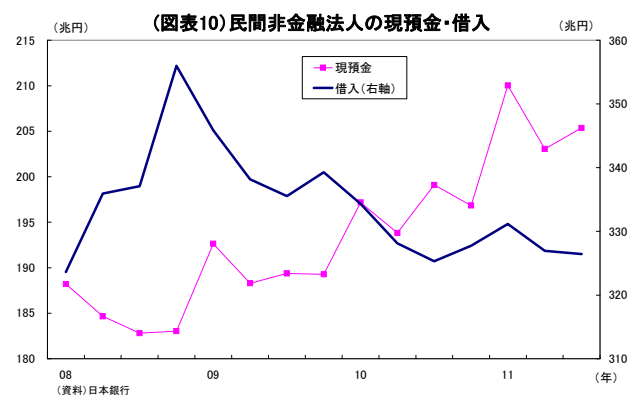
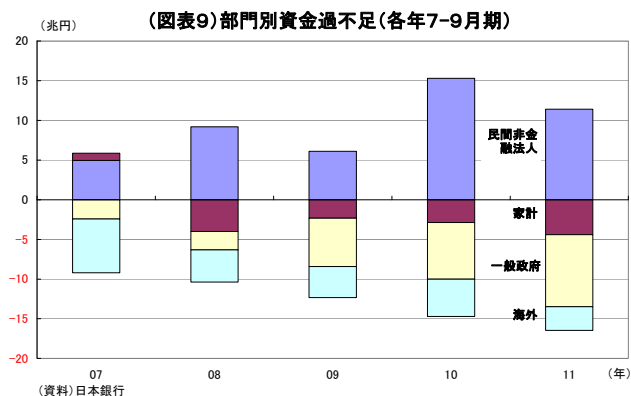
主要部門別の11年7-9月期資金過不足の状況を見ると、財政赤字に伴う一般政府の資金不足9.1兆円、家計の資金不足4.4兆円を民間非金融部門の資金余剰11.4兆円ほかで賄い、3兆円が海外に回っている構造。例年、7-9月期は企業部門で資金余剰、一般政府と家計で資金不足になる傾向が強いが、今回は企業の資金余剰額が前年比で減少する一方、政府と家計の資金不足額が拡大している(図表9,10)。

国債(国庫短期証券を含む)の保有者内訳を見ると、最近存在感を高めてきた海外部門の保有が引き続き増加し、残高は76兆円(前期末比9兆円増)と過去最高、全体に占めるシェアも8.2%と前回の7.4%から

急伸している。国全体では未だ資金余剰で海外資金に頼っていない構造だが、国際的なリスク回避の動き、資金分散化の流れの中で、短期債を中心に日本国債への海外資金流入が続いている。

また、一般政府の債務と個人金融資産との関係では、増加を続ける政府債務が 1093 兆円に達し、住宅ローン等の負債を控除したネット個人金融資産 1117 兆円に肉薄してきている。

日本国債の安定性を語るうえで用いられるいくつかの理屈のうち、「国内保有が大半」、「莫大な個人金融資産が国の債務を支えている」という前提に徐々に変化が出てきており、今後の動向が注目される(図表 11,12)。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。